

菜の花の沖を超えて

— 高田屋嘉兵衛の英知・良心・勇気 —

(株)日本設備工業新聞社
代表取締役社長 高倉克也

全5巻に及ぶ司馬遼太郎の歴史小説『菜の花の沖』(文春文庫)は江戸時代後期の海商・高田屋嘉兵衛(1769-1827)が主人公だ。司馬は嘉兵衛が生まれた淡路島=兵庫県洲本市における1985年の講演で「人の偉さははかりにくいものですが、その尺度を英知と良心と勇気ということにしましょうか。では江戸時代を通じて誰がいちばん偉かったでしょうか。学者、大名、発明家、いろいろいました。私は高田屋嘉兵衛だろうと思います。それも2番目が思いつかないくらい偉い人だと思っています」と語っている。司馬をこれほど魅了した「英知と良心と勇気」とはどのようなものだったのか。嘉兵衛の波瀾に充ちた足跡をたどると、くっきりとした実像が見えてくる。

新天地をめざす開拓者

嘉兵衛が貧しい農家の長男として生まれ育った淡路島は菜種油の原産地として油菜の栽培が盛んだった。晩春になると全島が黄色い菜の花で彩られたという。

島で取れた菜種は神戸市に送られ、水車を利用した加工品の搾油が北前船で諸国と取引された。『菜の花の沖』とは貧農から脱して漁師、船乗り、廻船業者として海に練り出した嘉兵衛の生きざまを象徴したタイトルにほかならない。

漁師をしていた嘉兵衛は18歳で故郷を離れ、船乗りとして資金を貯める。寛政7年(1795)に国内最大級の1700石摘の辰悦丸を建造し、まだ小さな漁村だった箱館=函館を拠点として本格的に廻船業を展開した。

幕府の近藤重蔵、間宮林蔵、最上徳内らの信用を得て蝦夷地交易を許可され、幕命によって択捉航路を開拓し、蝦夷地物産売捌方となる。さらに国後島と択捉島を結ぶ航路を発見し、択捉島ではアイヌの民を雇って漁場を開き、北洋漁業の礎を築いた。これらの功績によって嘉兵衛は享和元年(1801)、33歳の若さで幕府から蝦夷地常雇船頭に任命され、苗字帯刀を許される。姓は高田、屋号は高田屋と定めた。

一介の漁師から海商に成り上がった嘉兵衛は並々ならぬ才覚をそなえていた。しかしそれは机上の商才ではなくリスクを恐れない卓越した行動力を伴ったものだった。文字どおり新天地を切り拓くフロンティア・スピリットを体現していたといっていいただろう。

虐げられた者への共感

出世した者は往々にして威張ったり、増長したり、権力を振り回したりするものだ。嘉兵衛にはまるでそんなところがなかった。士農工商の埒外

にある漁師としての出自を忘れなかった。いわば最下層で虐げられた者の痛みを終生もちつづけていた。

松前藩に差別され、アイヌ勘定などという不当な商品売買を強いられていたアイヌの民に対して「みな人ぞ!」と正当な取引を行った。択捉島では豊富なサケやマスの漁法を教えている。

築いた富は道路整備、開墾、植林、造船、養殖、漁具の改良など積極的に地元還元しようとした。凶作の年は職のない人々を雇用するなど率先して救済事業に携わった。

市街の大半が焼失した文化3年(1806)の函館大火では店が類焼したものの、怯むことなく避難民に物資を与え、木材や日用品を原価で販売し、井戸を掘ってポンプを寄贈した。道路の改修、開墾、植林などにも私財を投じている。

嘉兵衛は現在のCSR=企業の社会的責任を時代を先取りして実践していた。その根底にあったのは虐げられた者への共感だ。司馬が称讃した嘉兵衛の良心とはみずからのルーツに由来するものとして理解することができる。

ウラータイショウ!

嘉兵衛の「英知と良心と勇気」はいわゆるゴローニン事件の際にもっともよく発揮された。

ゴローニン事件はロシア使節レザノフが日本との通商を求めて長崎に来航したことを発端としている。レザノフは半年間、港内に滞留させられたのちに申し出を拒否された。これに怒った配下のフォポストフが択捉島南部や津軽藩などの北方海域で略奪行為を働く。

報告を受けた幕府は奥羽の諸藩に派兵を命じ、蝦夷地を直轄領として厳戒体制を布いた。文化8年(1811)、千島列島を測量していたロシア皇帝艦ディアナ号のゴローニン艦長が水や食料を補給しようと国後島に上陸したところ南部藩の警備隊に捕えられ、函館で幽閉される。

ディアナ号はいったん引き返し、翌年ふたたび国後島に来航した。しかしゴローニンの消息が確認できなかったことから、水産物を移送中の観世丸から嘉兵衛をカムチャッカに連行する。このと

き嘉兵衛を慕う水夫たちが「一緒に連れていってくれ」と願い出て副艦長のリコルドは「世にも感激的な場面」と手記に綴っている。

厳冬のカムチャッカで嘉兵衛はロシア語を学び、一連の蛮行事件にロシア政府が関与していないことを証明・謝罪し、双方の誤解を解くようにリコルドを説得する。嘉兵衛に敬意を抱いていたリコルドも提案を受け入れ、ロシア政府と折衝する。

リコルドと共にディアナ号で出航した嘉兵衛は国後沖に停泊すると約束の証しとしてリコルドに髻を切り渡し、単身で島に乗り込む。嘉兵衛がロシアに侵略の意図がないことを力説した結果、幕府はゴローニン解放の条件としてロシア長官の謝罪文と略奪した武器の返却を要求する。これを了承したりコルドは必ず謝罪文を持って戻ってくると言い残してロシアに向かう。

残された嘉兵衛は函館の寺に軟禁される。しかし約4カ月後、リコルドは約束どおり謝罪文を手に戻り、ゴローニンは釈放される。

一触即発の状況のなかで嘉兵衛とリコルドがいなかったら両国は交戦状態になっていたかもしれない。海外への渡航・通商の禁止やキリシタン禁制などの鎖国政策が徹底されていた時代に嘉兵衛は日本とロシアの架け橋となり、国境を超えてリコルドとの友情を育んだ。それは小手先の交渉術ではなく嘉兵衛の渾身の「英知と良心と勇気」によってもたらされたものだ。司馬は「いまでも世界のどんな舞台でも通用できる人物」と評している。

命がけでゴローニン事件を解決した嘉兵衛に対してディアナ号の水兵たちは甲板から「ウラータイショウ!ウラータイショウ!」と連呼したという。ウラーはロシア語で万歳、タイショウは日本語の大將だ。

ウラータイショウという嘉兵衛への讃辞は真の英知と良心と勇気が万国共通の普遍的なものであることを紛れもなく証明している。



函館市の高田屋嘉兵衛像